

1. 授業の概要(ねらい)

教師とは、子どもたちに基本的人権としての学習を提供する職業である。そうである以上、教師の仕事は決してでたらめに行われてはならず、熟慮された方法に裏づけられたものでなければならない。

私たちはみな学校教育を経験してきているから、教師の用いる教育方法を、すでにいくらかは体験的に知っている。そしてそれを真似てみることは、実はそう難しいことではない。しかし、物真似がオリジナルのすべてを汲みつくせるわけではないし、そもそもその方法が目の前の子どもたちにとって充分なものであるとは限らない。したがって教師を志す者は、自分のよりよい教育方法をみずからつくりあげていく必要がある。

そのために本講義では、特に戦後日本の教育方法史に焦点を当てながらそこで蓄積されてきた著名な教育方法の「遺産」を学びとり、グループ・ディスカッション等を通してその現代における適用可能性を探ることで、みずからよりよい教育方法を考案・創出する力の獲得をめざす。

2. 授業の到達目標

- ①教育方法をめぐる歴史の展開を概説できる。
- ②教育方法をめぐる歴史的な成果のいくつかを詳細に説明できる。
- ③②の歴史的成果に現代的意義を見出し、みずからの教育方法を構想することができる。

3. 成績評価の方法および基準

- ・中間課題(対面の場合グループワークの成果物):40%
- ・最終レポート:60%

4. 教科書・参考文献

教科書

・帝京大学教育学部初等教育学科初等教育コース編(2020)『小学校教師の専門性育成』 現代図書

参考文献

・田中耕治編著(2017)『戦後日本教育方法論史(上・下)』 ミネルヴァ書房

5. 準備学習の内容

- ・毎回の講義内容はたがいに関連しあっており、すでに講義した内容を前提にそれ以降の講義が行われる。受講者は前回の講義で配布された資料を読み込み、十分に復習したうえで次回の講義に臨むこと。
- ・あらかじめ資料や文献を配布し、その読解を宿題とすることがある。その場合にはただ機械的に読むのではなく、そこから自分なりの意見を引き出すような批判的読解をおこなうこと。

6. その他履修上の注意事項

この授業はグループワークを含む授業であるため、学生たちの積極的な参加が非常に重要となる。受講者には、グループワーク時に他人任せにせず、みずから積極的に意見を表明する態度を求める。

7. 授業内容

- | | |
|--------|--|
| 【第1回】 | オリエンテーション——理論知と実践知の融合としての教育方法論 |
| 【第2回】 | 戦後日本における教育方法論史概説 |
| 【第3回】 | 生活綴方教育の方法論(1)——戦前における萌芽と戦後におけるその継承 |
| 【第4回】 | 生活綴方教育の方法論(2)——そのバリエーションと現代的展開 |
| 【第5回】 | 生活指導の教育方法論(1)——生活綴方教育からの離陸 |
| 【第6回】 | 生活指導の教育方法論(2)——集団づくり論への転回と展開 |
| 【第7回】 | 生活教育の方法論——コア・カリキュラムを中心に |
| 【第8回】 | 科学の成果を活かす教育方法論(1)——外からの現代化と内からの現代化 |
| 【第9回】 | 科学の成果を活かす教育方法論(2)——科学と生活／民主主義の結合 |
| 【第10回】 | 学力をめぐる教育方法論(1)——態度と測定可能性 |
| 【第11回】 | 学力をめぐる教育方法論(2)——〇〇力の飽和状況に抗して |
| 【第12回】 | 評価をめぐる教育方法論(1)——相対評価から到達度評価論へ |
| 【第13回】 | 評価をめぐる教育方法論(2)——到達度評価論への批判から真正の評価論へ |
| 【第14回】 | 道徳教育の方法論——どのような価値を、いかにして教えるべきか |
| 【第15回】 | おわりに——講義全体のまとめと発展
(※LMSにて遠隔実施)
(注:上記計画は、受講者の学習状況や問題関心に応じて変更することがあります。) |